

ジネット・ヌヴェーと ブラームスのヴァイオリン協奏曲

板倉重雄

ジネット・ヌヴェーは、今から100年前の1919年8月11日パリで生まれ、70年前の1949年10月28日、5度目の渡米の途上、飛行機がアゾレス諸島に墜落し、僅か30歳で亡くなった伝説の天才ヴァイオリニストである。

「内面性、熱情、力強さ、抒情性、音楽的知性のすべてを備えたパリジェンヌ。見る人の目を魅了する白衣の尼僧にも似た舞台姿」(ワールド・テレグラム紙、ロバート・バーガー／加藤真二訳)[1]

1947年11月13日と14日の両日、シャルル・ミュンシュ指揮ニューヨーク・フィルとブラームスのヴァイオリン協奏曲を演奏し、このような讃辞を得たヌヴェーは、毎シーズン、アメリカに招かれるようになっていた。1949年は1月に続いた訪米で、兄でイヴ・ナット門下のピアニスト、ジャン・ヌヴェーとともにセントルイス、サンフランシスコ、ロサンゼルス、シカゴを含む21の都市で演奏し、11月30日のカーネギーホールでツアーを終える予定だった[2]。翌1950年にはスイスの名ピアニスト、エトヴィン・フィッシャーとのブラームスのヴァイオリン・ソナタの録音や、ベートーヴェンとチャイコフス

キーのヴァイオリン協奏曲の録音[3]、ヨーロッパ・ツアー、同年夏には南アフリカ・ツアーが予定されていた[4]。このように、ヌヴェーは生前より世界の音楽愛好家から熱狂的な人気を獲得し、突然の死により伝説的な存在となった。フランスの衝撃は大きく、政府は勲三等レジオンドヌール勲章を彼女に授与し、パリ市議会はパリ18区の通りに彼女の名をつけることを議決した。また、フランスだけでなく世界各地で彼女の追悼演奏会が開かれたほどだった[2]。

音楽家の家系に生まれたヌヴェーは、5歳のときに母親にヴァイオリンのてほどきを受け、その後、リン・タリュエル(Line Talluel)夫人に学んだ。夫人によると「そんなにむずかしくないところだし、もう上手に弾けているから、練習しなくてもいいわよ」と言っても、幼いジネットは「もっと練習すればもっときれいに弾けるわ」と練習を続けたという[5]。そして、7歳のときピエルネ指揮コロンス管弦楽団と共演し、パリのガヴオー音楽堂でブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番を弾いてデビューする、という天才ぶりを示している[2]。巨匠ジョルジュ・エネスコに師事した後、11歳でパリ音楽院のジュール・ブーシュリのクラスに入学し、たった8カ月で一等賞を取り、卒業している。こんな短期間で卒業したのは半世紀前のヴィエニャフスキ以来だった[6]。1931年に出場した

ウィーン国際コンクールでは第4位に留まったものの、審査員のカール・フレッシュを感動させ、4年に渡って指導を受けることとなった。そして1935年、16歳のときワルシャワで開催されたヴィエニャフスキ国際ヴァイオリン・コンクールで、30歳以下の180名の応募者を抑えての優勝。第2位は当時27歳のダヴィッド・オイストラフだった。1936年にはハンブルクでヨッフムの指揮によりブラームスのヴァイオリン協奏曲を弾き、大成功を収めた[7]。ソヴィエト、アメリカやロシアにもデビューした。彼女はドイツで人気が高く、初の商業録音は1938年4月13日、ベルリンでのクライスラー、スーク、ショパン、グルック、パラディスの小品の録音だった[2]。翌年1939年3月には、同じくベルリンで、この年75歳を迎えたR.シュトラウスのヴァイオリン・ソナタを録音した[2]。

1940年6月、パリはナチス・ドイツに占領され、ヌヴェーの国際的なキャリアは一時停滞することとなる。この間、ヌヴェーはドイツからの招聘をすべて断り、パリから離れず、僅かに開かれるコンサートのほかは、楽曲の研究と毎日5時間の練習に打ち込んだ。兄ジャンとのデュオ・チームができたのも1942年のことである[2]。ヌヴェーは述懐している。

「占領下の生活はとても苦しく、未来もまた大変不確かでしたので、音楽はわたしの生活の中

で別の意味をもつようになりました。それは無くてはならないものになったのです」[8]

この間、1943年6月21日にパリのサル・ガヴォーでブーランクのヴァイオリン・ソナタを作曲者のピアノとともに初演したことは特筆される出来事だろう[9]。

パリ解放後、ヌヴェーは世界的な演奏活動を再開。イギリスに渡って1945年3月12日にはロンドンのウィグモア・ホールでリサイタルを開き[2]、3月24日にはロイヤル・アルバート・ホールでベートーヴェンの協奏曲を演奏、絶賛を博した[6]。同年11月21日、再びイギリスを訪れたヌヴェーは英HMVへの初録音、シベリウスのヴァイオリン協奏曲をたった1日で録り終えた。プロデューサーのウォルター・レグによると録音は午後2時に始まり、1時間半の休憩を挟んで午後10時に終了。ヌヴェーは休憩時間もヴァイオリンをさらい、午後8時頃には顎と首から出血していたが、録音終了後には当時勉強中だったウォルトンの協奏曲を全曲一人で弾いて見せたという。彼女は細身ながら長身で力強く、サイクリングや水泳を愛するヴァイタリティに溢れた女性だったと伝えられるが、そのことを裏付けるエピソードと言えるだろう[3]。

シベリウスの録音から事故死までのヌヴェーの世界を股にかけた活躍ぶり、すさまじい強行日

程一後から見れば「生き急ぎ」—にはまったく驚かされる。1946年には二度イギリスを訪れツアーと録音（ブラームスのヴァイオリン協奏曲の商業録音も含まれる）を行い、1947年には南北アメリカを、1948年にはイギリス、オーストラリア、アメリカを演奏旅行。とくに1948年10月から翌年1月のアメリカでは20を超える都市で計60回ものコンサートを開く強行軍だった。

戦後の4年の間、彼女がオーケストラとともにひんばんに取り上げた曲目は、ベートーヴェン、ブラームス、シベリウスの協奏曲、ショーンソンの《詩曲》、ラヴェルの《ツィガース》である。とくにブラームスの演奏記録は群を抜き、共演が判明した指揮者だけでもデゾルミエール（45、48年）、ミュンシュ（45、47年）、グッドール（46年）、バルビローリ（47年）、クナッパーツブッシュ（47年）、イッセルシュテット（48年）、ヴォルフ（49年）、アンセルメ（49年）、ドラティ（49年）と9人を数える^{[2][10]}。CDにしてたった7枚しかない、彼女の録音遺産の中で、下記に示すように4種もの録音が残されたのである。

- ①1946年8月16～18日 ドブロウエン指揮フィルハーモニア管（セッション録音）
- ②1948年4月25日 デゾルミエール指揮フランス国立管（バーデンバーデン・ライヴ）
- ③1948年5月3日 S=イッセルシュテット指揮北

ドイツ放送響（ハンブルク・ライヴ）

- ④1949年6月10日 ドラティ指揮ハーグ・レジデント管（ハーグ・ライヴ＝当CD）

実際、ブラームスのヴァイオリン協奏曲はスヴーの芸術家としての特質、テクニックの力強さ、正確無比な左手、奔放自在な右腕、演奏表現の壮麗さ、天性の類稀なパッション、といったものを発揮すれば発揮するほど、作品もまた生きる、という幸せな関係をもった作品だったのである。彼女とこの作品を共演したバルビローリは次のように回想する。「すべてがとても論理的で、美しく彫琢されていた」^[11]「私たちは全曲を休みなく、一言も言葉を発せずに演奏しとおした。彼女とのリハーサルは、話す必要など全くなかった。以前クライスラーとこの曲を演奏して以来、体験したことのない音楽的な満足感が心の底から燃えてくるのを感じた」^[8]。

「論理的」というのは興味深い指摘だが、イギリスの音楽評論家、タリー・ポッターも次のように指摘する。「彼女はナディア・ブーランジェに作曲を学んで以来、造形の感覚に敏感だった。第1楽章でカデンツァが始まる前までのタイミングは、フーベルマン、ブッシュ、シゲティ、ハイフェッツといった名手たちに比較できる」^[2]。つまり、ブラームスの「遅く、そして急がずに」の指定を守って、テンポを走らないことを指摘しているのだ。同様

なことが第3楽章にも言え、前のめりのリズムになる演奏が多いところ、ヌヴーのリズムは一つ一つ杭を打つように力強く、立体的で、熱狂的でありながらも音楽を立派に構築してゆくのである。こうした基本的なコンセプトは4つの録音に共通している。4つの録音のタイミングを較べてみよう。

①21分23秒／9分8秒／7分48秒

②22分19秒／9分30秒／8分19秒

③22分15秒／9分41秒／7分59秒

④21分56秒／9分9秒／8分2秒

②と③は8日違いで、タイミングも似通ったものとなっている。それに対し、①と④は明らかに第2楽章のテンポが②③よりも速い。ただ、①の場合、SPレコードの片面の収録時間の限界が4分半ということで、2面に収めるための配慮だった可能性が高い。④のテンポは死の年の彼女の意味と見るべきだろう。

「ヴァイオリンは私の職業ではなく、使命なのです。演奏家にとって大切なのは、自分の個性を深めてゆくことです。いつも同じように演奏するようになったらもう駄目、私は弾くたびに良くなってゆきたい」[12]

常に今の演奏を過去以上のものとしたいと願っていた彼女の、最後のブラームスのヴァイオリン協奏曲のライブ録音が、以前出たCDとは比較にならないほどの鮮明な音質で蘇った価値は

計り知れないものがあると言えるだろう。

[1]コロムビア XL5090 [LP] 解説書

[2]英Warner Classics 9029549048 [CD] 解説書

[3]英Gramophone誌第27巻12号

[4]仏Tahra TAH355/357 [CD] 解説書

[5]ハラルド・エッゲブレヒト/シュヴァルツァー節子訳「ヴァイオリンの巨匠たち」アルファベータ

[6]マーガレット・キャンベル/岡部宏之訳「名ヴァイオリニストたち」東京創元社

[7]独Acanta 233585 [CD] 解説書

[8]三浦淳史「20世紀の名演奏家」音楽之友社

[9]ピティナ・ピアノ曲事典 (<https://enc.piano.or.jp/musics/18222>)

[10]日本クナツパーツブッシュ協会サイト (http://www.kna-club.com/kna/kna-archiv/q_kna-concert07.html)

[11]独SWR SWR19018CD [CD] 解説書

[12]青木謙幸「想い出の名演奏家」才能教育研究会